

大森テニスクラブ



大森庭球コート開き記念撮影：大正12年12月6日

2列目右から二人目が伊集院兼知氏

黒井悌子さん、伊集院豊子さん、山田濤子さん、原田武一氏、朝吹磯子さん、熊谷一彌氏ほか参加者

高級住宅街に、乾いた打球音が鳴り響く。
大正12年に開設した「大森テニスクラブ」は今も尚、
この地に深い根を下ろす草分け的な存在です。
なぜ明治時代、実弾射撃場として使われていた地が、
テニスコートへと姿を変えたのか。
なぜこの地でなければならなかったのか。

「刀に込めた武士の魂」がキーワードです。



伊集院兼知氏

平成25年12月に創立90周年を祝いました

クラブの駐車場の角に「日本帝国小銃射的協会」があった事を示す石碑があります。1889(明治22)年に遡りますが西郷隆盛の実弟、西郷従道海軍元帥らにより、明治天皇の御発意による「臣民は文武両道に励むべしとの主旨の一端を担うべく、弓道、剣道に次ぐ近代武道のひとつとして、小銃射撃を国民に錬磨せしむべし」のもとに、実弾射撃場として使われていました。

「刀に込めた武士の魂をこれからの近代兵器たる小銃に込めてこそ、真の武士道による富国強兵をはかれる」との思いであったと伝え聞いていますが、その流派「合伝流」は西郷従道が最後の継承者として絶えます。

当時、大正初期、海が見渡せた「大森」駅から階段を上った丘の上に、同協会の会員用に硬式、軟式の各1面のテニスコートが射撃場の脇に造られました。武士道にも通ずる海外列強のスポーツマンシップを会得してみようとの試みでありました。

その後、「慶應義塾大学」の小泉信三元塾長(当時、庭球部長)と倶楽部創設者となります伊集院兼知(貴族院議員子爵。叔母の須賀は西郷隆盛の初婚の妻)との良いご縁もあり、慶應庭球部のメインコートとして、また、より多くの会員も

募れるようにと、コートを増設して「大森庭球倶楽部」を創設しました。それが1923(大正12年)のことです。

当時、大森村の何も無い荒涼とした丘の上、約15,000坪の広大な地は、その後、急速に閑静な高級住宅地として姿を変えていきましたが、今9面となったテニスコートは姿を変えることなく、真の武士の魂、真のスポーツマンシップの魂に護られ、守り、不動のテニスクラブとして今日に至ります。

「慶應大学」も参画した「大森庭球倶楽部」の創設でしたから、早慶戦はもちろんのこと関東選手権大会、朝日招待トーナメント、大森トーナメントなど数々の主要大会がここで開催されてきました。

小泉庭球部長はほぼ毎日、大森のコートで精進され、デ杯選手の原田武一も同庭球部員でありましたし、当時、かの熊谷一彌(錦織圭選手が96年の功績をぬり替えましたが)もコーチとして活躍されていました。

その後、永年にわたり「慶應義塾大学硬式庭球同好会連盟」の決勝の地として「連盟の聖地」とも呼ばれ、春、秋には約4,000名の学生選手の頂点を目指す恒例の決勝戦が執り行われています。

兼知は殺伐とした射撃場に

「テニス」という種を植えました

「刀に込めた武士の魂」については、武士道を想起します。

「儒教的礼節のなかに己を守り、家族を守り、城を守り、国を守るため他者に勝つことを求めるが、それは武力的、腕力的に他者を圧することではなく、武士が標榜したのは精神的な優位であり、その精神は己に勝つことにより磨かれていくものである」と。

言い伝えられている言葉、「ネットを使ったスポーツに共通した理念とは、対戦相手を直接的に傷つけることを手段、目的とせず、日頃、鍛錬して培った技と技を披露する中でその精神力を競い合うことにある」と、そして正に「テニスはコート上の格闘技と言われるほど激しいスポーツでありながら、それは最終的には精神力の「仕合」であるということです。

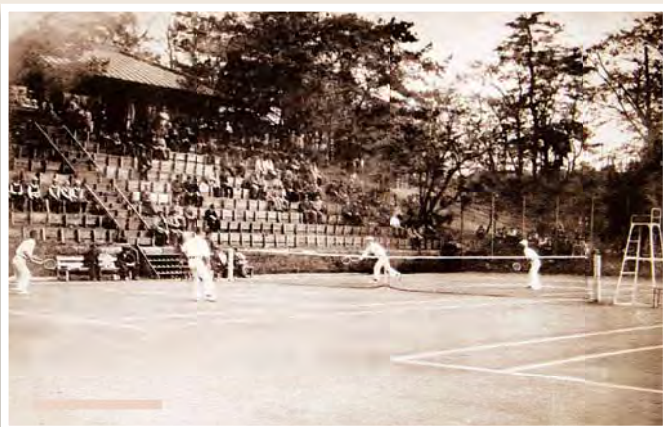
試し合う「試合」と称するより、当クラブでは仕え合う「仕合」と呼ぶに相応しいのではないか。先々代の理事長、伊集院兼信の言葉です。「精神力の切磋琢磨はお互いに敵視することではなく、対戦相手に仕えてもらっていると想えるスポーツマンシップこそが望まれる」。この漢字は「御前仕合」など使われることが多いですが、対戦相手がいてこそ、己の弱点を知ることが出来、それを日々の鍛錬で克服していく。「己に勝つことによって精神力を強化していく」という教えです。

真の武士道とは最低限の自己防衛は許しつつも究極は「相手に刀を抜かせないほどの立派な己たれ」であり、それは「己に勝つことにより磨かれる究極の精神力である」。「合伝流」が戦略思想の根本を孫子に求め、その哲学の根本を智、信、仁、勇、嚴の五徳に置いているとあることにふと、想いあたります。

思いだされるのは創始者の伊集院兼知が「日本帝国小銃射的協会」の理事でありながら、鉄砲、ピストルなどの火器を極めて忌み嫌っていたことです。「刀の一振り」と引き金の一絞りと異なり、鉄砲が改良され連発銃、機関銃、機関砲へと「無差別大量殺戮兵器」と化し、嫌な相手は有無を言わさず抹殺していくという延長には真の「武士の魂」を見いだせないことを憂慮していたと、伝え聞いています。

庭球というスポーツに魅せられ、実弾射撃場の脇に2面のコートを作って以来、この地に宿っているその様な魂に護られ、今日に至ります。時の流れで今、大森村は高級住宅地となりましたが、この丘の上の9面のコートはこれからの世代に受け継いでいかなければならない大切な精神的「聖地」なのです。

大森テニスクラブ



—————* 大森テニスクラブの沿革 *—————

1882年	明治15年	西郷従道らが本郷の向が丘に一般の人に小銃射撃の練習を奨励し、尚武の気風を盛んにする目的で東京共同射的会社と称する射的場を創設
1888年	明治21年	射的場を大森山王地区(旧木原山・道免・お伊勢原一小字3地区)に明治天皇からの御下賜金式百円及び会員からの寄付等により、14,578坪の土地を購入して移転 開場式、大射的会を開催し、その後日本帝国小銃射的協会と改称 小松宮殿下が総裁就任
	大正初期	同協会により、会員の為に硬軟各1面のテニスコートの新設
1923年	大正12年 4月	射的場敷地内の硬軟2面のテニスコートを改修、さらに3面増設 慶應義塾大学庭球部長小泉信三先生の依頼により同庭球部が大森コートで練習開始 熊谷一彌氏も後輩の指導にあたり、デ杯選手原田武一氏も学生時代にこのコートで練習
	9月	関東大震災による被害なし
	12月	一般への解放の意味を込めて、大森庭球倶楽部としてオープン
1924年	// 13年 3月	原田武一氏がハーバード大学に留学するに当たり送別試合開催
	4月	大森コートにて早慶庭球戦復活
	11月	久邇宮朝融(あさあきら)王殿下後の海軍中将御練習の為、来場
1925年	// 14年 4月	米国庭球選手キンゼー兄弟歓迎模範庭球大会(秩父宮雍仁親王殿下御覧)
	5月	第1回関東選手権を大森コートにて開催
	7月	三田稲門戦(慶應義塾・早稲田大学庭球部先輩同士の試合)
1927年	昭和2年 5月	東京朝日新聞社主催の朝日招待トーナメント開催
	10月	米国リチャーズ選手による模範試合(久邇宮邦久王殿下御覧戦)
1928年	// 3年 5月	関東選手権大会開催
	6月	東京朝日新聞社主催の朝日招待トーナメント
	9月	全日本選手権(翌年から昭和12年迄 甲子園、上井草、早大、日吉コート等で開催、昭和13年以降甲子園、田園コートで開催)
	10月	中華民国のデ杯選手によるエキジビジョンマッチ
1929 ~	// 4年 ~	関東選手権大会開催(昭和9年以降早大、明大、
1933年	8年	帝大コート他にて開催)
1933年	// 8年 6月	朝日招待トーナメント
	8月	慶應義塾大学庭球部の練習コートが日吉に移転するにあたり、大森で別離試合開催
1937年	// 12年	射的場を鶴見に移転し、大森射的場を閉鎖
1943年	昭和18年 4月	学徒動員により、部員激減、予科生のみでの早慶戦を大森コートで開催
1945年	// 20年 8月	慶應義塾大学日吉校舎及び敷地は進駐軍により、退去を命じられ、テニスコートは使えず荒れ放題の為、庭球部が翌年にかけて大森、田園、鎌倉にて練習再開
1946年	// 21年 3月	社団法人爽楽社(大森テニスクラブ)設立